

家畜衛生研修会（病性鑑定病理部門，2008）<sup>\*†</sup>  
 における事例記録（Ⅱ）

Proceedings of the Slide-Seminar held by the Livestock Sanitation Study Group  
 in 2008 <sup>\*†</sup> Part II

(2009年7月22日受付・2009年10月29日受理)

14 鶏の漿液膿性カタル性鼻炎および眼窩下洞炎

〔関口美香（大阪府）〕

肉用鶏，雌，約280日齢，斃死例。肉用鶏約700羽を飼養する農家において，2008年2月22日頃から顔面が腫脹したため3日間サルファ剤投与した鶏群において，28日に病性鑑定を実施した。ワクチンについてはNB飲水投与を実施していた。

剖検では，重度に消瘦し，右顔面は腫脹し，鼻孔から鼻汁が漏出していた。腫脹部分にはチーズ様物が貯留していた。大脳底は約5mm大に黄白色粗造化し，卵巣・卵管は萎縮していた。

組織学的に，鼻粘膜の粘液分泌は亢進し，鼻腔内には剝離上皮や偽好酸球等の炎症細胞を含んだ粘液が貯留していた。粘膜上皮は腫大・増生し，多層化や空胞化して

いた。眼窩下洞では，鼻腔と同様の所見に加えて，粘膜固有層の水腫，偽好酸球やリンパ球等の浸潤，結合組織増生がみられた（図14）。チーズ様物が貯留していた後方の眼窩下洞粘膜には肉芽腫が存在していた。大脳底は広範に壊死し，多数の偽好酸球やマクロファージ等が浸潤し，肉芽腫病巣が多発していた。

病原検索では，鼻腔内チーズ様物からPCRで*Avibacterium paragallinarum*の遺伝子が検出されたが，細菌分離および免疫組織化学検査は陰性であった。

本症例は，当初，伝染性コリエーザが疑われたが，脳および眼窩下洞の肉芽腫やチーズ様物内に真菌が認められ，免疫染色で*Aspergillus fumigatus*抗原が検出されたことから，アスペルギルス症と診断された。

※以降、詳しくは日本獣医師会雑誌Vol. 63 No. 4をご覧ください。

\* 〔独〕農業・食品産業技術総合研究機構 動物衛生研究所（〒305-0856 つくば市観音台3-1-5）

\* National Institute of Animal Health (3-1-5 Kannondai, Tsukuba, 305-0856, Japan)

† 連絡責任者：谷村信彦（〔独〕農業・食品産業技術総合研究機構 動物衛生研究所）

〒305-0856 つくば市観音台3-1-5 ☎029-838-7818 FAX 029-838-7825 E-mail : nt0410@affrc.go.jp

† Correspondence to : Nobuhiko TANIMURA (National Institute of Animal Health)

3-1-5 Kannondai, Tsukuba, 305-0856, Japan

TEL 029-838-7818 FAX 029-838-7825 E-mail : nt0410@affrc.go.jp